

(研究主題) SDG s の視点で考える外国籍の子どもと保護者への支援

(副題) 学校、地域、外部との連携で困り感に対応する

静岡県静岡市立富士見小学校 教頭 深 山 孝 之

1 主題設定の理由

昨年度から新型コロナウイルス感染症対応として、学校の在り方そのものを考える必要性を感じるようになった。学校だけでなく、家庭、地域、企業などが連携して子どもを育てる体制作りができなくてはならないこともわかってきた。学校の在り方を問うことで、同時に学校の役割についても語られる機会にもなった。SDG s では「全ての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を推進する」という目標が掲げられている。

このような状況の中、子どもの中には、学習についていけない、自分の居場所が見つけれない子が増えている。特に、外国籍の子どもたちへの対応は十分とは言えず、担任もどのように支援したらいいのか分からない事態が生じていることは確かである。数値的にも静岡市では、日本語指導を必要とする児童生徒数は年々増加傾向にある。日本語指導児童生徒は平成29年度で86名であったのが、令和3年度には131名と増えている。それに合わせて日本語指導教室の配置数や訪問指導の指導員の増加、指導時間の確保等は行われてはいるが、質の高い指導やプログラムの周知不足等が課題になっている。それによって、子どもも保護者も学校にいながら居場所を見つけられず困り感や孤立感を強めている傾向にある。静岡市では、外国籍の児童生徒ができるだけ身近な場所で充実した日本語指導のサポートを受けることができ、抵抗無く学校に通えるような体制を整えている。本年度は、日本語指導教室、訪問指導体制の強化、多文化共生の意識醸成等の取組を行っている。

今後も増加していくと予想される困り感を持っている外国籍の子どもや保護者への支援は、「誰一人取り残すことがない」学校の実現のためにも必要不可欠であると私は考えている。今までの静岡市の支援体制は、子どもたちへの支援が中心である。私は子どもの育ちを支える家庭環境が大切であると強く考えている。そこで、子どもへの支援を充実させると共に、保護者への支援を地域や外部の方々の力を借りて計画的、継続的に行えるようにすることが不可欠であり、その支援が子どもの可能性の芽を伸ばすことになると信じて、研究への取組を始めることにした。

本校でも、日本語指導が必要な子どもが年々増えており、現在は外国籍の子どもが20名在籍している。5年前は10名くらいだったので、5年間で2倍になっている。本校の地域の現状から今後も外国籍の子どもが入学してくる数は増えると考えられる。

外国籍の子どもであっても日本語の指導を必要とする子は半分くらいだが、言語や文化の違いで困り感を抱えている子は多い。クラスには1人か2人なので全体としては数パーセントであるが、確実に個別支援が必要な子どもである。特に言語の問題は私たちが思っている以上に大きい。教室で学ぶ子どもは学習がわからないことを表出することもなく、何とか現状を乗り切ろうと自分なりの知恵を働かせてその場を凌いでいるという状況である。保護者も日本語の意味がわからないというだけでなく、ふりがながなくて読めない、先生の話すことがわからない、学校から配布される通知を理解することができない等、多くの問題を抱えている。さらに、PTAの活動においてはどのように参加していいのかわからないだけなのに、外国籍の方は仕事をやらないとマイナス面として見られることもある。日本人と交わろうとしてもなかなか意思疎通ができないことで、同じ国の人とだけ会話したり、引きこもりになったりすることもある。

さらに、このような外国籍の方々の困り感に寄り添うためにはSDG s の持続可能な社会の開発目標の考え方を学校でも取り入れなければいけないと感じた。「誰もが平等に教育を受けることができる体制」を作りあげ、地域と学校がつながりを持つことで長く継続していけるような組織的な活動の創造を目指すことにした。

2 実践の概要と研究内容

(1) 「ちょこっとタイム」の設立<資料 1 >

令和元年度にPTAの方々と外国人の保護者支援の取組を始め、PTA活動に参加できない外国籍の保護者への対応の検討をPTA会長と教頭で考えたのがこの会の始まりである。

令和2年度から「ちょこっとタイム」として活動を始めた。PTA運営委員会の前にPTA会長と興味のあるPTA役員で「ちょこっとタイム」を設立して、外国籍の保護者への対応についての意見交換をする。設立当初のメンバーは6名。教頭、PTA役員と元保護者、民生児童委員、外国籍の保護者等で設立する。この場で得た情報を担任や日本語指導の先生方と共有することで、様々な支援の方法を考えることができた。令和3年4月からは、PTAの活動とは切り離して、独自の活動とし、担任もどのように支援をしたらいいのかに苦慮している外国籍の子どもたちへの学習会を行ってきた。

<これまでの経緯>

月日	参加者	内容
R2.1.17	スタッフ6名、タイの方夫婦、中国の方2組	学校の教育活動について対話形式で話す。中国語にふれる
R2.11.6	スタッフ6名、タイの方夫婦、中国の方3組	運動会や卒業式等の学校行事についての意見を交わす
R2.12.4	スタッフ6名タイの方夫婦	家での宿題について、やる気の出る言葉
R3.4.13	スタッフ6名中国の方1組	PTAとは切り話して曜日を火曜日にする
R3.6.8	スタッフ6名タイの方夫婦 フィリピンの方夫婦、中国の方	フィリピンの夫婦の方がいじめのことで相談があった。ニーズに合わせた支援開始

また、長く継続するためにメンバーが活動の理念を共有していることが大切であるので、以下に示す5つの居場所を設定し、活動の軸とした。

- ①情報を共有したり、収集したりする場（地域住民との情報の共有を含む）
- ②お互いの悩みや迷いを相談できる場
- ③元気を与えたり、もらったりする交流の場（二世交流を含む）
- ④日本語で会話をする場
- ⑤学びの場

(2) 外国籍の保護者の本音を引き出す対話の場作り<資料 2 >

外国籍の保護者の困り感に寄りそうことと外国籍の方々との交流をするための場を設定した。毎月1回(令和3年7月からは毎月2回)19時より会議室を借用して1時間くらいの対話の場を実施した。

外国籍の保護者の心配事の一つに子どもたちの学習への不安があるので、外国籍の子ども対象の学習会を毎週1回金曜日の放課後45分間行った。スタッフが中心となり地域の方々の協力を得て、子どもたちの学習のニーズをもとに学習支援を行い、次回の対応につなげるように記録を残していく。

(次の項で詳しく述べている)授業の中で子どもたちが困っていることや日本語での対話をする場としての機能も果たしている。

① 外国籍の保護者のニーズを知る調査

外国籍の保護者がどんなことに不安や困り感を持っているのかのアンケート調査をした。その結果、両親のどちらかが日本人であると、困り感はありませんが、両親が共に外国籍の方は困り感がある。一番の心配は「いじめ」についてであった。親が外国人ということでの偏見があるのではないかと、いじめを受けても言い返せなくて辛い思いをしているのではないかと心配があった。その他、日本語が読めないこと、通知などの内容が理解できないこと、宿題のやり方や学習の教え方等に不安を感じていた。

項目	困り感を感じていること	困り感を感じていないこと	困り感を感じていること	困り感を感じていないこと
1. 日本語が読めないこと	困り感を感じている	困り感を感じていない	困り感を感じている	困り感を感じていない
2. 通知などの内容が理解できないこと	困り感を感じている	困り感を感じていない	困り感を感じている	困り感を感じていない
3. 宿題のやり方や学習の教え方等に不安を感じていること	困り感を感じている	困り感を感じていない	困り感を感じている	困り感を感じていない
4. いじめについて	困り感を感じている	困り感を感じていない	困り感を感じている	困り感を感じていない
5. その他	困り感を感じている	困り感を感じていない	困り感を感じている	困り感を感じていない

② 調査をもとにした相談できる場や活動の設定

日本語が読めないという保護者の困り感には、学校では通知にはふりがなをふることにした。また、学校としてあまり難しい言葉を用いないで表現する努力をするように全職員に投げかけた。1年生の

保護者からは外国籍の方だけではなく、多くの保護者からふりがながあると柔らかい感じがする、という賞賛の言葉をいただいた。

「ちょこっとタイム」の語り合いでは、両親共にフィリピンの方が一番心配している「いじめ」の問題についての話題が出た。保護者の対応として自分の子どもがいじめにあった経験があるスタッフが対応し、心配していることを親身になって聞き、具体的にどのように対応したらいいのかわかりやすく説明した。今までどこに相談していいのかわからなくて困っていた方が相談の窓口があることに安心し、それから数回続けて参加するようになった。

また、お母さんがタイの方は家族で相談に来て、高校生の長女の進学のことでの悩みを話した。ここには、民生児童委員として地域のことを熟知し、様々な窓口を持っているスタッフが対応した。専門学校に行きたいが、両親との間で了解がされていないということである。長女は、受験の難しさや入学金のこと、奨学金の書類等で両親をなかなか納得させることができなくて、自分の進路について誰にも相談できないでいた。彼女の思いを丁寧に聞き、保護者への説明、試験までの日程確認等を第三者として仲介に入った。「ちょこっとタイム」以外の時間でも受験の小論文の書き方、面接での答え方などの練習をしたり、奨学金の書類の書き方をアドバイスしたりして、何とか受験をすることができるまでの手助けができた。書類の書き方や説明の理解等は、外国籍の方々にとってはすべてのことが日本人の方よりもかなりの時間を費やし、挙げ句の果てにはできなくて断念したり、子どもに我慢させたりすることになっている。日本の行政上の課題を感じた。

(3) 「ちょこっとタイム」での子どもの学習支援<資料3>

① 日本語に慣れる学習の場作り

保護者のニーズの中には子どもの学習活動への不安もあった。学校での学習活動では子どもたちが日本語の理解ができていないのか、取り残されていないだろうか心配になっている。特に両親が外国籍の方は保護者自身が日本語に不安があるので家庭学習での支援もできないことが悩みとなっていた。

そこで、毎週金曜日の放課後14:30~15:15の45分間に日本語に慣れることを目的に「ちょこっとタイム学習会」を開催することにした。スタッフとボランティアの大学生が子どもたちのニーズをもとに、授業での学習を補う形でマンツーマンでの支援を行っている。子どもたちの話をじっくりと話を聞くと、日本語の理解は思っていた以上にできておらず、先生の話は早口でわからないこと、わからない時は周りの人の様子を見て体裁を整えること、わからないことを先生には言えないこと等、本音の話を聞くことができた。授業の内容の学習も行う必要があるが、自分が学びたいことに興味をもってやるのが日本語を使えるようになるので、学びのニーズを聞き取り、なるべく興味をもてるようにした。2年生のMさんは自分の名前を漢字で書きたい、Kさんはスライム作りの手順を作文にしたいという願いがあったのでそのことも含めて学習を行った。終わりには「楽しかった。また来週も来るよ」という声を聞くことができた。

さらに、金曜日は午前中に日本語指導教室があり1時間授業に合わせた支援を日本語指導教員がマンツーマンで行っている。日本語指導教員と子どもたちの学習状況や学習の進め方を共有し、金曜日の午前中と放課後が結びつく形で学習の定着を図る連携をとっている。さらに学習状況を担任にも伝え、個別指導や教師の関わり方について参考にさせていただくことで、その子のニーズにあった学習が提供でき、外国籍の子どもの子らしさを引き出すことができている。学習だけでなく、生活上の不安や友達関係など、特に「いじめ」については自分から話ができない子どもたちの代わりに情報提供をすることで、担任が適切な対応ができる手助けとなる。学級では時間的にも個別指導は難しいので、外部との連携によって少しでも理解を進めることができると考えている。

本来は学級の中で外国籍の子どもたちが自分らしさを出せるのが理想だが、自分に自信をもつまで、自分の思いが表現できる場での学習を積み重ね、学級の中で活躍できるようになることを願っている。

(4) 組織として長く続く支援体制作り・地域ともつながっていく

長く続けるためには組織的な活動にしていく必要がある。そのために、地域の方々が自分たちで組

織を運営していける体制を作ることにした。活動は学校応援団組織の中に位置づけた。スタッフはボランティアであり、PTAの役員、元PTA会長、民生児童委員、外国籍の中国語を通訳できる保護者、大学生等をメンバーとして長く継続していけるように、地域の活動として推進することにした。

毎月1回総務会として第4火曜日にスタッフが集まり、現在の状況、次回の内容について検討する仕組みを作った。学校は場所を提供する、子どもの情報を共有するという役割を担うことにして、支援するのは保護者や地域の方々に任せる形にしている。NPO法人等で成功している組織的な仕組みで大切な事は、活動の理念や活動方法をお互いに共通理解し、同じ方向を向いて進めていくようにすることである。そのためには賛同したり、新たな考えを提案したりする様々な立場の方々、多様な年齢の方で組織作りをしていくマネジメントが必要である。また、活動に携わる方々の専門性を生かし、適材適所でやりがいのある活動を時間をかけずに行う工夫が求められる。そのため活動をやりながら見直し、その時々外国籍の方々のニーズに合わせた活動ができることが理想である。

また、本校で行っている活動は本校ならではのものではなく、どこの学校でも実現できる活動である。中心となってできる人を見つけ、理念をはっきりさせた組織を作り、場を提供することである。「どこでも誰でもいつでもできる」支援体制作り、これが長く継続いくことができる基盤となる。

スタッフは組織として活動そのものを企画、運営していくが、活動に関わるボランティアは随時受け入れている。地域の中でもボランティアをやりたいのだが、「生かせる場がない。専門的な知識があるのだが教える機会がない、子どもたちとふれあう場がほしい。」という思いをもっている人がいる。富士見学区社会福祉協議会ではみんながつながり合い・支え合える地域をつくろうと子どもボランティア隊の募集を学校に依頼してきた。地域の方々が地域の活性化を進めるために組織を作り、多くの人を巻き込んでの活動を企画している。私たちからは、地域の方々へのボランティア活動へのニーズ調査を行うことを提案し、その中で私たちの活動に賛同し講師として参加したい方を紹介してもらうことで、地域の中での外国籍の保護者や子どもを支援していく活動の広がることを期待できる。行政や自治会とも結びつくことによって、誰もが安心して教育を受ける場作りが進められていく。ボランティアの学生には学校からボランティア活動証明書を発行することで学生の意欲向上につながった。

学校、地域、行政、外部機関がうまく結びつき、連携をとることができるような構造的な連携を作ることで、「全ての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」というSDGsの考え方を実現させることになる。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・「ちょこっとタイム」の設立により外国籍の保護者、子どもたちが安心して話ができる居場所作りができ、コミュニティの場を探している外国籍の方々に手を差し伸べることができた。
- ・保護者、地域、外部と情報を共有して進める組織ができたことで新たな学びの場が開かれることになった。学校だけで抱えていた問題を外部と共有することで学校のSOSに力を貸すことができた。
- ・外国籍の保護者が安心して話ができる場を提供したことで、学校の教育活動やPTA活動を理解することができ、同じ学校の一員として活動に参加することができるようになった。

(2) 課題

・本来は学校でやらなければいけない外国籍の保護者や子どもへの支援だが、学校ではやりきれない現状がある。学校としては、外国籍の子どもたちの思いが理解できず、授業中も我慢をしたり、やっているふりをしたりする姿を見てはいるが、具体的な対応をすることはできなくて、残念ながら適切な支援を行うことができないでいる。この現状から目を背けないで、今後増えていくと考えられる外国籍の子どもたちや保護者のニーズにあった学びの場の創造をしてほしい。どの学校でもできる実践であると考えているのでこのような取組が広がっていくことを願っている。全ての人に公正な教育の確保、誰一人取り残すことがない学校の実現のために、どこでも、いつでもできる活動を行うために、一歩踏み出す活動を今後も継続していきたい。